保育だより

第３号
令和７年９月 30 日
庄和すずらん幼稚園

保育随想

★恩送り

２か月休刊させていただいたこの保育だよりですが、今月号より前園長の森田博先生から引き継ぎ、発行して参ります。

長い長い残暑を経て、ようやく秋めいてきました。ここ数年は、ちょっとずつの季節の変化というよりは、極端に季節が移り替わり、体が追い付いていくのに必死な気がしませんか？とは言え、秋の虫の声や、秋の花などを見聞きすると、改めて、四季を感じられるこの日本という国に生まれたことに感謝の思いが湧いてきます。

秋といえば「食欲の秋」「スポーツの秋」「読書の秋」「芸術の秋」・・・といろいろありますが、皆さんは何を思い浮かべますか？

私は、読書の秋です。小説の世界観に没入しては、妄想を膨らませることが、幼い頃から好きでしたので、秋だけに限ることではないのですが・・・

先日読んだ本の中で出会った素敵な言葉が「恩送り」というものでした。「恩返し」ではなく？と思ったのですが、読み進めていくと「なるほど！」と腑に落ちたのです。誰かから恩を受けたら、その人に恩を返すのが恩返し。でも、その人がすでに亡き人であった場合や遠く離れて生活しているときなどは、恩返しができなかったなあと悔やむ場面があります。先日亡くなられた森田博園長先生からたくさんの恩を受けながら、恩返しができていなかった私にとっては、出会うべくして出会った言葉なのかもしれません。その小説によると、誰かから受けた優しさなどを、必ずしもその人に直接返すというのではなく、別の人に伝えていく、手渡していくということで、優しさや善意の連鎖を生むというものだというのです。

皆さんは今まさに子育ての真っ最中。この子にいつか恩返しをしてもらおうと思いながら子育てをなさっているわけではないでしょう。お子さんに施す愛情は見返りを期待するものではなく、その愛情を受けたお子さんが、周囲のお友達や大人たちにたくさんの笑顔や純真な思いを伝えていくというその行為が、周囲の人々を幸せにしていく気がします。お子さんたちがやがて大人になって、自分の子どもを授かった時、またそこで連鎖が生まれますね。「恩送り」はまさに身近なものなのと気づかされます。

先日のことですが、１４時半ごろに外の掃除をしていたとき、ある年中の男の子が、ひとりですっと近づいてきて、ちょっと恥ずかしそうに、小さい声ですが、でもはっきりと「先生、お掃除してくれてありがとう。」と言ってくれたのです。心いっぱい温かさが広がり、誰に言われても「ありがとう」の言葉は気持ちがよくて多幸感のある言葉だなあと思いました。「恩送り」というと、何か難しい言葉にも聞こえますが、「ありがとう」「うれしいよ」「また、まってるね」という受け入れ言葉を意識することで、自然と「恩送り」になっているのかもしれませんね。

一日一回は言ってみましょうか！「ありがとう」って。